

# いわゆる「気づきの『けり』」再考

——その諸相、および他の諸用法の中での位置づけをめぐる——

坂田 一 浩

はじめに——問題の所在——

- ① 天の原振り放け見れば夜そふけにける（家流）よしゑやしひとり寝る夜は明けば明けぬとも（万葉・三六六・二）  
② 人もなき空しき家は草まくら旅にまさりて苦しかりけり（家流）（同・四五二）

- ③ かくのみにありける（家流）君を衣ならば下にも着むと我が思へりける（家留）（同・二九六・四）

- ④ 人々は帰し給ひて、惟光朝臣とのぞき給へば、ただこの西面にしも、持仏据ゑ奉りて行ふ、尼なりけり。

（源氏・若紫）

- ⑤ 見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮（新古今・三六・三）

右に挙げた「けり」の諸例は、一般に「気づきの『けり』」

といわれているものである。これらは従来、例えば「過去のこととが現在にまで存続していることを新たに認識した意をあらわす」（大野晋一九六八）などとして一括りに論じられることが多かった。しかし今、上掲諸例の「けり」を少しく注意深く観察してみるならば、そのありようが決して一様なものではないことに気付く。

すなわち、一口に気づきの「けり」といってもそれは、「気づく」行為の多様なあり方に応じて、さらにそのあり方が言語表現にどう反映されるかによつて、さまざまな様相を呈する。例えば上に挙げた例においても、等しく気づきの用法とみなされるものでありながら、その気づきの内容が、後で検討するようになどいう認知過程を経て得られた情報なのか、あるいはそれに対する心的はたらきかけのありようがいかなるものであるかという点において、はなはだ異なつた要素を含むものであることがわかる。そもそもこの、「気づき」という語が持つ内実とはたしていかなるものか、という点に思いをめぐらすなら

ば、それがきわめて漠然としたものであることにあらためて気づかされる<sup>①</sup>。

また、問題の対象をさらに広げて、「けり」における、気づきとそれ以外の用法との関係性に思いをいたすならば、我々は次のような課題に逢着する。すなわち、

「けり」の語性、意味区分を考える上で、いわゆる「気づき」の用法をどう位置付けるべきか？

a. 本義？ 派生義？ あるいは単に文脈的意味に過ぎないのか？

b. いわゆる「伝承回想」の用法との関係性

c. いわゆる「説明」「詠嘆」といわれる用法との関連

さらに、「けり」における気づきの用法の内実、すなわちその意味構造を的確に見極めることは、「き」「けむ」「けらし」など、従来からある種の対応をなすと考えられている他の助動詞との間で、どのような体系を構築しているのかという点についても一つの解答を与える作業であろう。

ここで、私がこのような問題意識を持つに至った経緯について少し述べておきたい。さきに私は上代語の「けり」について「めのまへ性」という観点をもとに、助動詞「き」との意味的対応関係を検討してみた結果、次のような図式を得た（坂田一浩二〇〇九）。

き ①（自己の経験） 目睹回想（直接経験の「き」）

②（他からの伝聞） 氏族内伝承回想（神話の「き」）

②（他からの伝聞） 他氏族伝承認知（間接経験の「けり」）

けり ①（自己の経験） 目睹認知（気づきの「けり」）

そうしてさらに考察を進めた結果（坂田一浩二〇一〇）、右の図式において目睹認知（発話時点において表現主体の「めのまへ」にある事態を述べ立てる用法）としたものが従来の気づきの「けり」にそのまま相当するものではなく、後者には「めのまへ事態」を直截表明するものと、そうでないものが存在し、その点で単に目睹認知というチームでは包括しきれない種々の要素からなるものであることが確認された。そしてその内実を見極めるためには、気づきという認識過程がどういう要素からなりたつものであり、それが実際の「けり」の用例においていかに反映されているかを検討しなければならないという点に思い至ったのである。

本稿は如上の問題意識にもとづきつつ、万葉集を中心とした上代語の用例によりながら、一つの考えを示すことをそのねらいとする<sup>②</sup>。

## 一、「気づきの『けり』」をとらえ直す、 二つの視点

本節では、従来気づきの「けり」と呼ばれてきたものについて具体的な検討を試みることにするが、それにあたっては「は

じめに」において述べたように、それらの用例の間に感得されるある種の違いがどのようなものであり、さらに進んでそれが何に起因するものであるかという点について逐一みてゆくところからはじめたい。まず冒頭の例の①と②のけりの違いを見てみると、①の「けり」は表現主体が直接経験した、発話時におけるめのまへ事態、すなわちその時点で即物的経験を述べ立てているのに対し、②ではめのまへ事態を、発話時点において表現主体の眼前にない事態（ここでは「旅」を織り交ぜつつ、概念化された事態として述べ立てている）。

このような違いは、「けり」によって述べ立てられる事態情報、どのような認識様式によってもたらされたかによるものである。すなわち、前者が表現主体の発話時点における感覚情報（直接経験）であるのに対し、後者ではそれが概念化を経た内容となっている。

では、ここでいう経験、概念の両者はこの場合、どういう関係にあるとみるべきであろうか。私見によれば前者は、表現主体の感覚情報に基づきつつ、それを生の形で直截的に表明しているのに対し（これらが往々にして一回性の事態であることは、注意を要する）、後者はこのような一回性の直接経験が同様の事象において何度か積み重ねられたために形成された、当該事象に対するある固定化された捉え方である。したがってそれは目の前にない事態を想起しながらなされることもあるわけである<sup>③</sup>。

ところで、気づきの「けり」が述べ立てている内容を認識手段という点からみると、今みてきた経験、概念の他に、

⑥世の中は空しきものとあらむとそ（登曾）この照る月は

満ち欠けしける（家流） 四四二

右の例のようにめのまへ事態によりつつも（用例中の「この」という語は、それを端的に示している）その背後にある因果・論理関係に思いをはせ、それを気づきの対象とするものがある。以上挙げた経験、概念、因果・論理関係は、「けり」が述べ立てる事態内容を、表現主体がどのような経路、認知プロセスを経て獲得したのかによる違いであった。それはまた、気づきの対象となる事態の性質に関わるものであるともいえる。

一方で気づきの「けり」の諸相は、今一つ別の角度からも捉えることができる。

すなわち、

⑦珠洲の海に朝開きして漕ぎ来れば長浜の浦に月照りにけり（家里） 四〇二九

右の例では発話時におけるめのまへ事態を、今認め知ったものとして述べ立てているのに対し、

⑧宇治川に生ふる菅藻を川速み取らず来にけり（家里） つとにせましを 一一三六

では、以前めのまへ事態として経験した事柄を再度想起し、確認している。一方、

⑨ 山守のありける（家留） 知らにその山に標結ひ立てて結ひの恥しつ 四〇一

右の例では「山守のありける」事態は「めのまへ時点」では認識されていなかったものである。すなわちこの例では、以前めのまへ事態として経験した事柄を想起している点は⑧と同様であるが、それに対する事実認識自体を改めている点で相違がみられる。

ここでは⑦のようなものを「認知」、⑧を「追認」、⑨を「改認」と呼ぶことにする<sup>4)</sup>。

このように捉ええると、「はじめに」に挙げた③の例においても二句目の「家流」は改認（めのまへ時点では「かくのみにあ」とは思っていないかった）、それに対して一首末の「家留」は追認（めのまへ時点においてもそう思っていた）という風に、一首中の二つの「けり」の違いも明確になるであろう。

ところで、以上挙げた例はいずれも、「けり」が表現主体についての直接経験を述べ立てているものであるが、認知、追認、改認の別は、「けり」が概念を述べ立てている場合にも同様に確認される。すなわち、冒頭に挙げた②は「概念―認知」の例であり、

⑩ 咲く花は移ろふ時ありあしひきの山菅の根し長くはありけり（家里） 四四八四

⑪ ますらをもかく恋ひけるを（家流平） たわやめの恋ふる心にたぐひあらめやも 五八二

⑩は追認（傍点部「は」の含みがそれを裏付ける）、それに対して⑪は改認（傍点部「も」の逆態の含みに注意）の例と見られる。してみれば以上提示した諸項目の関係は、ひとまず次のように示されるであろう。

	① 認知	② 追認	③ 改認
1. 経験（目睹）	○	○	○
2. 概念	○	○	○

表1 万葉集における気付きの『けり』の分類、および用例分布

さて、さきに私は、経験、概念に並ぶものとして因果・論理関係の項目を立てたのであるが、次にこれについてみてみると、先に挙げた⑥の例はひとまず認知の例と見得る。一方で、因果・論理関係を表明する「けり」にも、理論的には認知のほか追認、改認の例が存在し得るはずである（ある事態につき、その原因を「やはりそういうことだったんだ」と再確認する（追認）、今までその原因だと思っていたことを思い直して「こ

「ちうこそ其の原因だったんだ」とする（改認）などが、万葉集の例を検する限り、明確に追認、改認と判断される例は管見の限り確認できない。これはそもそも、論理構成過程そのものが、認知、追認、改認の系列と、ある種の連続性を有していることによるのではないかと考えられる。たしかに、⑥の例において「けり」は、因果・論理の関係性そのことに対する気づき（驚き）を表明しているものであり、この点で論理関係は、「けり」として経験、概念などと同じく気づきの対象となる内容である。と同時に、

⑫朝髪所思ひ乱れてかくばかりなねが恋ふれそ夢に見えける（家留） 七二四

右の例からも窺えるように因果・論理関係の表明はまた、ある事態（「夢に見え」）についてその背後にあつてそれを成り立たせる事象（「朝髪の・・・恋ふれそ」）を認知したことを示すものであり、それはある意味で、当該事態に対する、背景事象の認知による改認であるとも見得るのである。

ところで、そもそも因果・論理関係の表現とは、発話時点におけるめのまへ事態や非めのまへ事態（表現主体の脳裏にある以前の経験すなわち「元めのまへ事態」や伝聞情報、概念など）を構成要素として、それらをその論理の枠組み（すなわち前件・後件）にはめ込むことによってなされるものである。ゆえにそれは、実際の用例においては経験、概念といった他の項目と重複しつつ、それらをその論理に包み込む形で現れることも多い

ものである（例⑥を参照）。

このようにみてくると、因果・論理関係の表1における位置づけは縦軸・横軸両項をつなぐものの、両者の境界領域に位置するものといえる。あるいは表1の縦軸と横軸は、因果・論理関係の項目を介して、あたかもメビウスの輪のごとく連続したものと捉えるべきであろうか。

以上のように、気づきの「けり」というものを事態認知のありかたという観点から分析することにより、その内部にみられる用法の区分、およびそれら相互の連続性が浮き彫りになるものと考えられる。

## 二、気づきの「けり」の分類

— いわゆる「間接経験」の用法をも視野に —

以上みてきたように、従来「気づきの『けり』」といわれてきたものは私見によれば、

I 気づきの対象となる事態の属性（どのような認識過程、作用によって得られた情報か）

II 入手した情報（気づきの内容）に対する表現主体の態度、取り扱い方

以上の二つの観点を軸に分類しうるものであるように思われる。そこで次に考えるべき問題は、これら気づきの「けり」といわれているものが、「けり」の他の用法、なかでも「間接経験」

とよばれているものといかなる関係にあるかという点である。

まずごく常識的にみて、間接経験は情報入手経路という点からみて、直接経験と対応する関係にあるものである。この間接経験には、個人レベルでの情報の授受に関わる「伝聞」と、ある集団において継承されている情報、すなわち「伝承」とがある。伝聞の中のあるもの（伝播が広範囲かつ、世代を超えて行われる可能性を含む情報）も含めて間接経験は、概念として特定の集団に共有される情報である場合も多い。ここに、さきにとりあげた気づきの「けり」における「概念」の項目との連続性も認められる。

となると次に、経験、概念にみられた認知、追認、改認の三つのカテゴリが伝聞・伝承にも見られるか否かが問題となる。今この点につき用例を検してみるに、

⑬今聞くに仲麻呂と心を同じくして、密かに朕を掃はむと謀りけり（家利）。又密かに六千の兵を發しととのひ、又七人のみして関に入れむとも謀りけり（家利）。精兵をして押し排きて壊り乱りて、罰ち滅ぼさむと云ひけり（家利）。  
（続紀宣命・天平宝字八年十月九日）

⑭神代より言ひ伝て來らくそらみつ大和の国は皇神の厳しき国言靈の幸はふ国と語り継ぎ言ひ継がひけり（計理）・・・八九四

⑮相見ては恋慰むと人はいへど見て後にそも恋まさりける（家類）二五六七

⑬の例は孝謙天皇が藤原仲麻呂の乱の報に接した直後（今聞くに）の語がそれを端的に示している）の驚きを表明したものであり、伝聞にして認知を表す例と見られるものである。一方、⑭の例を見るに、「そらみつ大和の国は皇神の厳しき国言靈の幸はふ国」と語り継がれ、言い継がれてきたことは、作者大伴家持にとっては以前から聞きなじんでいた事柄であつただろう。ここでの「けり」はそれを想起しつつ、そのことに対する認識を（その内容に変容をきたすことなく）新鮮なものとする、といった含みをもっているであろう。これを卑近な例で説明すれば、学生時代歴史の教科書などで習い覚えた出来事で、それから年月を経て、その舞台を実際に訪ねた時に感じられる、ある種の新鮮な感覚とでもいったところであろうか。

さらに⑮の例では「相見ては恋慰む」という他者からもたらされた伝聞情報に対する認識を、自己の経験を機縁として「見て後にそも恋まさりける」と改めている。伝聞―改認の例と見得るものである。

このように、伝聞・伝承の用法においても認知、追認、改認の三項目が等しく確認される。とすると、これを経験・概念・論理と同一カテゴリのもとに所属させることが可能であろう。するとさきに提示した表1は、前節で論じた因果・論理関係の項目も含めて、さらに次のように展開できるであろう<sup>5)</sup>。

	① 認知	② 追認	③ 改認
1. 経験（目睹）	○	○	○
2. 伝聞・伝承	○	○	○
3. 概念	○	○	○
4. 因果・論理関係	○	?	?

表2 万葉集における『けり』の分類、および用例分布

なおここで、右の表のそれぞれの項目に相当する例を列挙してみる。

1―① 経験（目睹）認知

- 1…名くはし 吉野の山は 影面の 大御門ゆ 雲居に  
そ 遠くありける（家留）… 五二  
2 珠洲の海に朝開きして漕ぎ来れば長浜の浦に月照りにけり（家里） 四〇二九  
3 磯ごとに海人の釣船泊てにけり（家里） 我が船泊てむ磯の知らなく 三八九二  
4 妹が紐解くと結びて竜田山今こそもみちそめてありけれ

（家礼） 二二一一

- 5…濱に出て 海原見れば 白波の 八重折るが上に  
海人小舟 はららに浮きて 大御食に 仕へ奉るを  
ちここに いざり釣りけり（家理）… 四三六〇

1―② 経験追認

- 6 楽浪の志賀さざれ波しくしくに常にと君が思ほせりける（計類） 二〇六  
7 ぬばたまのその夜の梅をた忘れて折らず来にけり（家里） 思ひしものを 三九二  
8 わが大君天知らさむと思はねばおほにそ見ける（溪類） 和東柚山 四七六  
9 宇治川に生ふる菅藻を川速み取らず来にけり（家里） つとにせましを 一一三六  
10 春さればするなす野のほととぎすはとと妹に逢はず来にけり（家里） 一九七九

1―③ 経験改認

- 11 山守のありける（家留） 知らにその山に標結ひ立てて結ひの恥しつ 四〇一  
12 潮待つとありける（家流） 船を知らずして悔しく妹を別れ来にけり 三五九四  
13 かくのみにありける（家流） ものを猪名川の奥を深めて

我が思へりける 三八〇四

14 恨めしく君はあるかやどの梅散り過ぐるまで見しめず  
ありける (家流) 四四九六

2—① 伝聞・伝承認知

15 秋の田の穂向き見がてり吾が背子がふさをりける (家  
流) 女郎花かも 三九四三

16 帰りける (家流) 人來たれりといひしかばほとほと死に  
き君かと思ひて 三七七二

2—② 伝聞・伝承追認

17 鶏が鳴く 吾妻の国に いにしへに ありける (家留)  
ことと 今までに 絶えずいひ来る 勝牡鹿の 真間の

手児奈が… 一八〇七

18 皆人の恋ふるみ吉野今日見ればうべも恋ひけり (来) 山  
川清み 一一三一

19 夜くたちて鳴く川千鳥うべしこそ昔の人も偲ひ来にけれ  
(家札) 四一四七

2—③ 伝聞・伝承改認

20 手に取るがからに忘ると海人の言ひし恋忘れ貝言にしあ  
りけり (来) 一一九七

21 朝顔は朝露負ひて咲くといへど夕影にこそ咲きまさりけ

れ (家札) 二二〇四

22 秋の夜を長しといへど積もりにし恋を尽くせば短かかり  
けり (家里) 二三〇三

23 紀伊道にこそ妹山ありといへ玉くしげ二上山も妹こそあ  
りけれ (来) 一〇九八

3—① 概念認知

24 富士の嶺に降り置きし雪は六月の十五日に消ぬればその  
夜降りけり (家里) 三三二〇

25 人もなき空しき家は草まくら旅にまさりて苦しかりけり  
(家里) 四五一

26 心ぐきものにそありける (鶏類) 春霞たなびく時に恋の  
繁きは 一四五〇

27 妹とありし時はあれども別れては衣手寒きものにそあり  
ける (家流) 三五九一

3—② 概念追認

28 みやびをに我はありけり (家里) やど貸さず帰しし我そ  
みやびをにはある 一二七

29 縦さにもかにも横にも奴とそ我はありける (家流) 主の  
殿戸に 四一三二



### 3-③ 概念改認

30 否と言へど強ふる志斐のが強ひ語りこのころ聞かずて朕

恋ひにけり (家里) 一三二六

31 住吉に行くといふ道に昨日見し恋忘れ貝言にしありけり

(家里) 一一四九

32 おろかにそ我は思ひし乎布の浦の荒磯のめぐり見れど飽

かずけり (介利) 四〇四九

33 ますらをと思へるものを太刀佩きて可爾波の田居に芹そ

摘みける (家流) 四四五六

### 4 論理・因果関係認知

34 わが背子がかく恋ふれこそ (恋礼許曾) ぬばたまの夢に

見えつつ寝ねえすけれ (家礼) 六三九

35 三香原久迹の都は荒れにけり (家里) 大宮人のうつろひ

ぬれば (遷去礼者) 一〇六〇

36 今朝鳴きて行きし雁が音寒みかも (寒可聞) この野の浅

茅色づきにける (家類) 一五七八

37 夕さらば君に逢はむと思へこそ (念許曾) 日の暮るらく

も嬉しかりけれ (家礼) 二九二二

さてここで、これらの用例を通観してあらためて問題となる点につき、一、三述べておきたい。

まず、認知と改認は、実際の用例ではそのいずれかを明確に

判断しかねるケースがまま存在する。そもそも改認とは、表現主体が以前経験した事態、あるいは既にその脳裏に概念化された事態に対する認識（今これを、森重敏一九六九の表現を借りて「成見」と呼ぶことにする）を改める行為であるから、ある「けり」が改認を示すものとして理解されるためには、この成見の存在が理解主体において（文脈などの手がかりを通して）明らかに感得されなければならない。そうでない場合には、認知との区別が不明瞭になる。今、角度を変えてこれを表現主体の側から言えば、認知と改認との差は、発話時点における認知内容と、その直前までの認識（成見）との対比がどれだけ意識されているにかかっているともしえる。例えば、発話時におけるめのまへ事態について、

花咲きにけり

と表現した場合、「(てつきり) 咲いていないと思っていた(のに)」という成見が強く意識されると改認となるが、一方でそういうった先入見をもたない、いわばまったく素の状態で当該事態に気づくこともあり、この場合は認知の用法ということになる。

このように、両者の区分が一見明瞭でないケースも存在するが、「気づき」という認識行為において成見の有無は重要な要素であり、それによって認知か改認かが明確に判別できる例が存在するのもまた事実であるから、やはり両者は区別されるべきであると考ええる。

次に、因果・論理関係認知の場合は、「ば」「と」「已然形＋こそ」やミ語法との共起がその文型的特徴として指摘できるが、一方で、逆接表現を伴った左のような例も、広い意味での論理関係を表すものとしてここに分類することができであろう。

(森重敏一九六九もこの点に言及する)

38 我が待ちし秋は来たりぬ然れども (雖然) 萩の花そもい

まだ咲かずける (家類) 一二二三

39 いちしろくしぐれの雨は降らなくに (零勿国) 大城の山

は色づきにけり (家里) 二二九七

40 天離る鄙にも月は照れれども (弓札礼杼母) 妹そ遠くは

別れ来にける (家流) 三六九八

これらの例における逆接の論理を支えるものとして、成見としての命題 (例えば38でいえば「秋来たりぬれば、萩の花咲く(ものこそ)」といったところか) の存在が不可欠である。「けり」はいはば、その成見にそぐわない事態に対する認知を表明しているのであり、この点で成見に対する一種の改認であるともいえよう。ここでもやはり、前節で述べたような、因果・論理関係と改認との連続性が認められるように思われる。さらに2-③の伝聞・伝承改認の諸例と、文型上の類似がみられることに注意すべきであろう。

### 三、気づきの「けり」の捉え直しを通して 見えてくるもの

#### ―助動詞「き」との意味的対応―

さて、以上のように気づきの「けり」の意味構造を捉え直してみると、他の助動詞との対応関係も違った角度から、より鮮明に見えてくるように思われる。本節ではこの点について、特に「き」との対応についていささか私見を述べることにする。

前稿(坂田一浩二〇一〇)でも述べたように、上代語において、直接経験(目睹回想)の「き」に対応するのはいわゆる気づきの「けり」であった。しかしこれまでの検討を踏まえた上でいえば、直接経験の「き」に厳密な意味で対応しているのは、気づきの「けり」といわれるもののうち、前節の表2における1-①「目睹(経験)認知」の用法である。両者は、直接経験による感覚情報を述べたてている点において共通の基盤を有しつつも、後者、すなわち目睹(経験)認知の「けり」が発話時点におけるめのまへ事態、いわば「今めのまへ」事態を述べ立てているのに対し、前者、すなわち直接経験(目睹回想)の「き」では発話時点以前に経験しためのまへ事態、いわば「元めのまへ」事態の叙述にあずかるものという点で、際立つた対照をなしている<sup>(6)</sup>。

一方、上代の「き」には今一つ、神話を語る際に用いられる「伝承回想」の用法があるが(これについての詳細は坂田一浩

二〇一〇を参照)、これは先の表2の中の2―①「伝聞・伝承認知」と対照をなすものであり、そのありようは先程述べた直接経験の「き」「けり」と軌を一にするものである。してみれば、「き」における「回想」は、「けり」において見出し得た認知、追認、改認と同じ次元のものとして、というよりも、そもそも回想を含めたこれら四つの項目は、入手した情報に対する表現主体の態度、取り扱い方に関わるものという点において、一連のプロセスとして捉えるべきものではないかと考える。

このことを端的に示す例として、

愛しきかも皇子の命のあり通ひ見しし(之) 活道の道は荒  
れにけり(鶏里) 四七九

見まく欲り我が待ち恋ひし(之) 秋萩は枝もしみみに花咲  
きにけり(家里) 二二二四

おろかにそ我は思ひし(之) 平布の浦の荒磯のめぐり見れ  
ど飽かずけり(介利) 四〇四九

右のような「し(き)」「けり」共起構文がある。これらの例を見るに、「き」の回想事態を「けり」によって改認するという流れが、一連の認知プロセス上に位置づけられることを示しているものと考えられる。この点からみても、認知・回想に至る一連の流れにのせて「き」「けり」の相関性を捉えることも可能であろう。

ここで問題となるのは、「けり」における追認と「き」における回想の違いであろう。両者はいずれも、以前認知した事態

を発話時点において改めて想起するという共通点をもち、場合によってはその判別が困難なものである。しかし同じく想起の一種に属するといっても、「き」による回想は、今仮にそれが述べ立てる事態を一つの絵に見立てるならば、あたかも画中に視点を入り込ませ、その中に没入するがときのものであるのに対し、「けり」による追認は事態を一幅の絵として外から眺めるといった違いがあるであろう。これは「はじめに」の③に挙げた、

かくのみにありける君を衣ならば下にも着むと我が思へり  
ける(家留) 二九六四  
の末句の「けり」(追認)を

をとめらが袖振るやまのみづ垣の久しき時ゆ憶ひき(寸)

吾は 五〇一

右の例における「き」と対比させてみるによっても理解できるであろう。換言すれば「き」の回想は事態をウチの視点から眺めるもの、「けり」の追認は視点をソト(典型的には発話時の状況)に置いて、そこから当該事態を捉えるものとも言える(1―②の諸例が往々にして後悔の含みを帯びているのもこれに起因するであろう)。また、「けり」の追認には「なるほど、こういうことだったな」と確認する口吻が感得され、それはいきおい、言い聞かせのニュアンスを帯びることもある。その場合の言い聞かせの対象は、自分自身であったり、あるいは対他的になされたりもする。とりわけ後者の場合は、以前から

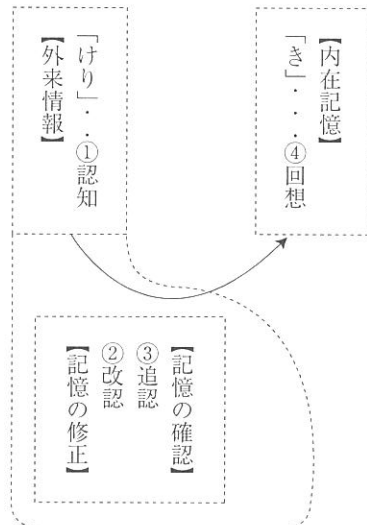
認知していた事態についてわざと今気づいたかのように装うことによって聞き手にそれを強く印象づけるといった表現効果を生み出すことがある（3―②、28の例がその典型であろう）。これに対しておしなべて「き」には、こういった言い聞かせ、すなわち「説得」の含みは希薄である。

従来、「き」「けり」がともに回想を表すとされてきたのも、この追認と回想が上述のような共通点をもっていることに起因するものと考えられるが、両者の述べたてにおける視点、姿勢の違いに留意すべきではないだろうか。

次に、「けり」において確認された表2の縦軸の項目については、「き」ではどのような分布がみられるであろうか。「き」「けり」双方が共有しうる項目としては経験・伝聞・伝承の二項目であり、他の概念、論理・因果関係については、万葉集をはじめとする上代資料の用例を検する限り、「き」が述べたてている明確な例は確認されない<sup>1)</sup>。この事実はそもそも、観念的な操作を経た情報は「き」によっては直截に述べたてにくいということを暗に示しているであろう。以上述べたことを図示すると次のようになる。

	① 認知	② 改認	③ 追認	④ 回想
1. 経験（目睹）	ケ	ケ	ケ	キ
2. 伝聞・伝承	ケ	ケ	ケ	キ
3. 概念	ケ	ケ	ケ	?
4. 論理・因果関係	ケ	?	?	?

図1および表3 「き」「けり」の意味的  
対応モデル（キ＝「き」、ケ＝「けり」）



右表においてこのように位置づけてみると、「き」と「けり」が1—①と1—④、および2—①と2—④の二つの組において、「内在記憶の回想」と「外来情報の認知」という点で対応をなしていることが確認される。と同時に「けり」は、「き」に比して用法上の守備範囲が広いこともわかる。そもそも「き」は非めのまへ事態しか表し得ない助動詞である。これに対して「けり」はめのまへ、非めのまへ双方の事態を取り扱うことができ、それが、概念、因果・論理関係の例にみられるように、めのまへ、非めのまへ両事象を観念的に構成しながら述べたてるということを可能にしているのである。

## おわりに

本稿では一般に気づきの「けり」と呼ばれている用法につき、用例相互に感得されるある種の違いを検討することを通して、分析の基礎となる二つの分類基準を見出し、それをもとに気づきの「けり」の意味構造を分析してみた。さらにその枠組みは、他の間接経験といわれている用法、さらには助動詞「き」をも包括しうるものとなり得るのではないかという見方を提示してみた。

従来、ともすれば気づきの用法を、「けり」における局所的な用法として特別扱いする向きもあったようであるが、同じ「けり」である以上、その中には他の用法（とみなされている

もの）に通有する要素が必ずや含まれているはずである。それを的確に抽出することにより、「けり」の意味構造を体系的に捉えることも可能になるのではないだろうか。本稿はそれに向けての、ささやかな取り組みである。

## 【注】

(1) そもそも一般に気づきの「けり」といわれているものの定義は論者によつて異なり、一致するところを見ない。またとりわけ、「間接経験」や「詠嘆」「説明」などといわれている用法との関係性については様々な見解があるが、ひとまず本文に挙げた大野晋（一九六八）、あるいは糸井通浩（一九七七）の、「それまでにすでに存在している事象・事実であるにもかかわらず、認知されず、意識領域の外に放置されていた事柄であることを意味する」、これらの定義によりつつ、気づきの「けり」の範疇に入る用例を定めることとする。また、「けり」における気づきの用法と他のそれとの関係について論じた先行研究に関しては、すでに鈴木泰（一九九〇）においてある程度体系的にまとめられているので、詳細はそちらを参照されたい。

(2) 以下、用例の下に番号のみを挙げたものは、特に但し書きのない限り万葉集の例である。なお、引用本文は岩波の新体系本によったが、表記を若干改めた箇所がある。

(3) このように、同様の事象に関して似通った経験が何度も繰り返されると（個人レベル、集団レベル双方において）、それが意味として把握され、概念を形成する。例えば古代語においてこういったプロセスを端

的に象徴するものとして、接続助詞「は」が偶発、恒常の両条件を表し得るという現象がある。すなわちそこには、同様の偶発的経験（偶発条件）が幾度となく経験された上ではじめて、それが恒常的なものとして認識され、ひとつの概念（恒常条件）が形成されるという心的過程がそのまま反映されている（詳細は阪倉篤義一九九三を参照）。

また森重敏（一九六九）は、この種の、概念化された事態を表明する「けり」が同じく概念のとりたてにあずかる助詞「は」と共起しやすい傾向にあることを指摘し、その例として次の歌を挙げる。

不尽の嶺にふり置く雪は（老）六月の十五日に消ぬればその夜降りけり（家利） 四〇二三

（４）気づきの「けり」をこのような視点から分類することは、加藤浩司（一九九八）に既に見られるところである。氏は蜻蛉日記にみられる「けり」の検討を通して、いわゆる気づきの「けり」を以下の四つに分類する。（六八～七五頁）

#### ① 追認回想

・「表現主体がある事象の生起に遅れて（発話時になつて）気がついたということを示すもの」

・「表現主体の現在の反省の結果、あることに思い至つたというもの」

#### ② 詠嘆的再認回想

「以前の自身の行為や感情を現在の意識の内に思い返し、再認識していることを示す」

#### ③ 解説的再認回想

「聞き手に対する説明・解説といった機能が色濃く感じられるもの」

#### ④ 自身に関する婉曲的表現

加藤氏のいう追認は、本稿でいうところの認知、改認に、再認は本稿でいう追認に、それぞれ相当するものであるが、認知と改認は次節で述べる理由（「成見」の有無）から、やはり区別されるべきであろう。そもそも加藤氏の考察は日記文学を考察の対象としているため、資料の性格上、発話時におけるめのまへ事態の認知の例が現れにくい。加えて氏の考察では和歌の用例を意識的に検討対象から除外していることも、氏が「けり」におけるめのまへ事態認知の例を積極的に認めなかった（氏の論においては①の追認も、あくまで「回想」の一種である）一因となっているように思われる。

また、「追認」「再認」という用語は混乱を招きやすいので、本稿ではこれらをそれぞれ「改認」「追認」と呼びわけることとする。

（５）表において因果・論理関係の項目をこのように位置づけたのは全く便宜的な措置に過ぎない。これを厳密に表すとすれば、三次元動画による模式図を必要とするであろう。

（６）ついながら、ここである「今めのまへ」事態を述べた典型的な助動詞は「り（あり）」および「たり」であろう。これらを含め「けり」および、今めのまへ事態の原因を推量する「らむ」はいずれもその構成要素に「あり」を含んでいる。一方、「元めのまへ」事態を表す「き」は「未めのまへ（未だめのまへならざる）」事態を表す助動詞「む」と際立った対立をなす。私は以前（坂田一浩二〇〇九）、いわゆる古代語の過去、推量の助動詞相互の関係性について左のような図式を提示してみたが、

「き」——「けり」

(確定系列)

— — —

「けむ」——「らむ」——「む」

(不確定系列)

この図において、「けり」「らむ」を結ぶ線の midpoint に両者の共通語基としての「あり」を置くと、「き」——「あり」——「む」という対角線上の系列が浮かび上がってくる。私はこれが、「元——今——末」めのまへ事態を述べたての古代語助動詞の基本系列だと考える。

(7) 因果・論理関係を表明する「けり」に関しては、「き」よりもむしろ、いわゆる原因推量の「らむ」との、文型上、表現機構上の顕著な対応が指摘できる。これに関する詳細は次稿を期したいが、今その対応の一例を以下に示す。

今朝鳴きて行きし雁が音寒<sup>なつめ</sup>みかもこの野の浅茅<sup>あさち</sup>色づきにける (家類) 一五七八

垣はなす人の横言繁<sup>よこごえ</sup>みかも逢はぬ日まねく月の経ぬらむ (良武)

一七九三

いちしろくしぐれの雨は降らなくに大城の山は色づきにけり (家類) 二二九七

秋風は身をわけてしも吹かなくに人の心のそらになるらむ

古今・七八七

東の市の植木の木垂るまで逢はずしみ (久美) うべ恋ひにけり

(家利) 三一〇

吹くからに秋の草木のしをるればむべ山風をあらしといふらむ

古今・二四九

### 【参考文献】

糸井通浩 (一九七七) 『なりけり』 語法の表現価値——「桐壺」「若菜下」を

中心に『国文学 解釈と教材の研究』二二—

大野晋 (一九六八) 『日本人の思考と述語様式』『文学』三六—二

加藤浩司 (一九九八) 『キ・ケリの研究』和泉書院

阪倉篤義 (一九九三) 『日本語表現の流れ』岩波書店 (岩波セミナーブック

ス 四五)

鈴木泰 (一九九二) 『古代日本語動詞のテンス・アスペクト——源氏物語の分

析——』ひつじ書房

森重敏 (一九六九) 『けり』の意味分化——その現実性と真実性と観念性——

『万葉』七〇

坂田一浩 (二〇〇九) 『めのまへ性』という観点の導入による、古代語助動

詞の分類に関する一卑見『国語国文学研究』(熊本大学) 四四号

坂田一浩 (二〇一〇) 『内在記憶』と『外来情報』——上代語助動詞『き』

『けり』の意味領域に関して——『国語国文学研究』(熊本大学) 四五

号

### 【追記】

本稿は平成二十三年五月、熊本大学黒髪古典研究会における発表内容を

もとにしたものです。席上、多くの方々から貴重なご意見を賜りました。  
この場を借りて心よりお礼申し上げます。

(さかた かずひろ／大学院社会文化科学研究科博士課程

第一回修了／中国・広西大学)